OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』に関する環境行動論的研究
Author(s)	林田, 大作
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	林田大作（はやしだだいさく）
博士の専攻分野の名称	博士（工学）
学位記番号	第 18746 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	**都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』に関する環境行動論的研究**
論文審査委員	（主査） 教授 舟橋 國男 （副査） 教授 柏原 士郎　教授 吉田 勝行　助教授 鈴木 毅 助教授 木多 道宏

論文内容の要旨

本論文は、オフィスワーカーが生活環境の中に可能性を発見し、意味づけることによって『場所』を作る行動を、環境行動論の視点から論考したものである。

第1章では、研究の背景、目的、意義、論文の構成について述べている。

第2章では、既往研究を参照精査し、本研究の主な論点を述べ、研究課題を整理している。

第3章では、東京都内神田および品川の職場周囲に構築されている、サードプレイスと位置づけられ得る『場所』を調査・考察し、オフィスワーカーの基本的なサードプレイスならびにそれぞれの地域特有のサードプレイスを明らかにしている。また、職場周囲の『場所構築』と歩きまわり行動の相補的関係性も示している。

第4章では、神田から品川へ職場移行した場合の、職場周囲の『場所構築』の変容を考察している。調査結果を個人単位に考察し、『場所構築』と歩きまわり行動をパタン化して特徴を整理し、また、オフィスワーカーの個人的な生活状況変化も論点に加え、環境移行に伴う『場所構築』の変容、職場周囲の生活との関係について総合的な考察を加えている。

第5章では、オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』へと研究対象を広げ、東京圏・大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーの「居心地の良い場所」の調査・考察を行っている。オフィスワーカーにとっての代表的な「居心地の良い場所」、それらの生活圏上の位置、居住年数との関係が明らかになり、「居心地の良い場所」における頻度、滞在時間、同伴者などについても明らかにされている。

第6章では、「居心地の良い場所」構築のきっかけと環境への働きかけを考察している。主なきっかけは無目的的な歩きまわりや目的外の活動などオフィスワーカー自身の活動であること、『場所構築』のきっかけや環境への働きかけは東京圏と大阪圏で様相が異なっており、両都市圏における人間－環境関係の特徴も論じられている。

第7章では、オフィスワーカーによる『場所表現』の様相を取り扱い、「する」「なる」「である」の分類軸を設定して考察を行っている。自由記述文、および居心地が良い理由から、『場所』の様態表現のキーワードが得られ、「居心地の良い場所」における人間－環境関係の考察、「居心地の良い場所」のタイプ分類、『場所のアフォーダンス』の考察に関する基礎的方向を示している。

第８章では、総括を行い、本研究の成果を確認するとともに、今後の課題と展開を論じている。

論文審査の結果の要旨

都市における場所の欠如とその克服に関する研究は、近年様々な観点から取り組み始められているが、社会経済活動の中心的担い手であるいわゆるオフィスワーカーについては未だ充分な検討が行われていない。オフィスワーカーの日常生活は、ファーストプレースとしての自宅とセカンドプレースとしての職場との２極を基軸として構成されているが、彼等はこれら２つの拠点以外に、“第３の場所（サードプレイス）”として、職業上の必要性や交流・親睦或いはリラクゼーション等の場を職場の周辺に発見し、それぞれに意味づけして『場所』を構築しており、それらの豊かさが職業生活の充実にも深い関連を有している。

本論文は、このような課題について、大都市中心部におけるオフィスワーカーのサードプレイス構築ならびに利用行動の実態を、その環境条件との関連のもとに解明し、理論的検討を加えた基礎的研究であり、得られた主な結果は以下の通りである。

(1) オフィスワーカーは、そのライフスタイルの特徴から職場および職場周囲において、仕事・リフレッシュ・交流・食事などの活動を行い、それらの活動のための不可欠の『場所』－“第３の場所（サードプレイス）”－を構築している。

(2) 職場周囲が歩き回りやすい環境であること、特に「自由な歩き回り行動」は「寄り道する場所」や「自分の場所」などの構築と相補的な関係を有し、また、職場周囲に「よく行く場所」や「リフレッシュする場所」が構築されやすい環境であることも職場周囲の生活の質に影響する。

(3) 「下町的な界隈性を有する近代的なまち」から「計画的に大規模再開発された現代的なまち」への職場移行においては、場所構築の縮小傾向が認められ、職場周囲には職場の延長的な性質を持つ「セミサードプレイス」が構築されやすい。また、前者の環境に小規模かつ単一機能のオフィスビルが存する場合、「セカンドプレイスからサードプレイスへの仕事の持ち出し」が見られ、後者の環境に大規模かつ複合機能のオフィスビルが存する場合、「サードプレイスからセカンドプレイスおよびセミサードプレイスへの仕事以外の活動の持ち込み」が見られる。

(4) オフィスワーカーにとって「働く環境の移行」は、職務移行・人生移行などの個人状況の変化によっても起こり得る。時には職場移行以上にオフィスワーカーの行動を規定し、オフィスワーカーからの環境への働きかけとなって現出する。

(5) オフィスワーカーは職場周囲以外にもサードプレイスを構築し、「居心地の良さ」を追求する面からは、むしろ職場及び職場周囲から逃れようとする傾向にある。居心地のよいサードプレイスは、当該都市圏居住歴との関係の下に、自宅周囲、通勤途上、等の生活圏に構築され、日常生活自体が場所構築の主たるきっかけとして働いている。

(6) 構築された環境においては、その場所の「居心地の良さ」を持続するために、環境への働きかけが行われ、また、環境に働きかけることで「居心地の良い場所」が構築されている場合もある。

(7) 場所の様態表現の言語学的分析のために、「する」「なる」「である」という分類軸を考案し、「居心地の良い場所」の様態を表現した語を分類し、「する」「なる」「である」に関する代表的なキーワードおよびキーワード間の関係を明らかにしている。これらは、オフィスワーカーの「活動」および「心理」に対応する「環境の物的要素」の持つ資質－「環境のアフォーダンス」－に関する研究を行う上で有効である。

以上のごとく本論文は、都市におけるオフィスワーカーの生活の質に影響を与える『場所』について、その構築行為と要因を明らかにし、都心におけるオフィスを主とする生活環境としてのまちづくりとその維持管理を考えるための示唆を得ており、建築工学、特に建築・都市計画学の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。